

氏 名	うへ だ やす つぐ 上 田 恭 嗣
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 88 号
学位授与の日付	平成 12 年 11 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	薬師寺主計の建築活動とアール・デコ様式に関する研究
	(主査)
審 査 委 員	教 授 森 田 孝 夫
	教 授 河 邊 聰 教 授 日 向 進

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、建築家・薬師寺主計が大正期から昭和初期にかけて岡山県という一地方都市ですぐれたアール・デコ様式の建物を設計したことを明らかにするとともに、倉敷のまちづくりの基盤施設となった大原美術館などの設計活動を詳細に調査・分析し、これまで全く知られていなかった薬師寺の建築活動の全貌を解明し、その業績を検証して、日本近代建築史に位置づけるものである。

これまで薬師寺は、村松貞次郎の「日本近代建築の歴史」(1977)の中で後藤慶二の同窓生として紹介されるにとどまり、ほとんど認知されなかった建築家である。倉敷市のまちづくりの原点になった諸施設の設計も顧みられることもなく、地元でも注目されなかった。しかし岡山県において重要な建築活動をした建築家であり、日本人建築家としてアール・デコ様式を導入した役割を評価し、近代建築史における正当な位置づけが求められる。

「序章」では、研究の背景と目的を述べ、薬師寺の建築活動に関してこれまで研究がなかった背景を推論する。そして本論の構成と要旨を記述している。

「第一章 薬師寺主計の年譜」において資料などから年譜をまとめている。薬師寺は、大原孫三郎の奨学金を得て東京帝国大学工科大学建築科に学び、陸軍省経理局建築課を経て建築事務所を構え、大原家のために中國銀行旧本店などを設計している。1921～1923年のヨーロッパ視察では、日本で無名であったル・コルビュジェに会っている。1936年、大原家を去って後の陸軍大臣・宇垣一成をたよって政治にかわり、戦後失脚している。

「第二章 薬師寺主計の建築活動」では、縁者や藤木工務店倉敷支店が保管していた建築資料や工事経歴書などから建築作品リストを作成して、経年的にどのように建築活動が展開されたかを考察している。設計した54作品中、アール・デコ様式は1926～1929年に完成した5作品である。

「第三章 倉敷におけるまちづくりと大原美術館」では、大原孫三郎の社会事業の構想のもと、薬師寺が倉敷市旧市街地の正末から昭和初期にかけての近代的まちづくりのさきがけとなる一連の施設づくりを行っていることを明らかにしている。一人の建築家が一つの地域をつくりあげていく例は、類を見ないものである。後継者の浦辺鎮太郎にも直接面談し、薬師寺の業績を聴取して確かなことを確認している。

「第4章 アール・デコ様式と中國銀行旧本店」では、薬師寺の設計になる中國銀行旧本店の解体前の実測調査、撮影記録、図面資料などから、ファサード、内部意匠、家具、照明器具などを一貫してアール・デコ様式という最先端の意匠で設計していることを初めて明らかにしている。そして、薬師寺の芸術的感性を評価し、わが国の建築家によるすぐれたアール・デコ様式の建築であることを近代建築史上の新たな位置づけとしている。

「第5章 その他の作品にみられるアール・デコ様式について」では、同時期、住宅作品にアール・デコ様式を採用したことを確認し、特に藤岡郊二郎は外観、内装ともにアール・デコ様式で一貫した表現が行われ、洗練されたアール・デコ様式のデザインの設計を行っていたことを検証している。

「終章」では、研究結果のまとめと今後の課題について述べている。

論文審査の結果の要旨

薬師寺主計は、明治17年(1884)岡山県総社市で生まれ昭和40年(1965)に没した。申請者は、大正期から昭和初期にかけて約20年間の岡山県を中心にした薬師寺の設計活動を明らかにするために、空襲によって資料が焼失しているにも関わらず、薬師寺の縁者や友人、弟子、建設会社旧社員などに面接し、彼等のもとに残された資料を丹念に収集して現存する建築の照合や無くなった建築の探索を進め、薬師寺の建築活動の全貌を明らかにした。この実証的探求は評価できる。本論文の成果は、岡山県の郷土史に引用されている。

倉敷市の重要伝統的建造物群保存地区にある大原美術館、有隣荘、中国銀行倉敷本町支店など、倉敷のまちづくりの種となったすべての施設を薬師寺が設計していることを明らかにし、従来画家の小島虎次郎が設計したと誤認されていた大原美術館の設計過程を詳細に検証している。さらに建築主・大原孫三郎の社会思想をさぐり、「富を生まれ育った土地を豊かにし、その土地を美しくするために用いる」という大原の考え方や薬師寺の建築コンセプトの関係を分析している点も評価することができる。

アール・デコ様式は、1925年パリの現代装飾美術・工業美術国際博覧会によって世界に広まり、パリ25年様式などとも称されるが、アール・ヌーヴォー様式に比べ、直線的で幾何学模様やシンメトリーの形態が好んで用いられた。日本では、一貫してアール・デコ様式を用いた代表作に外国人建築家の設計による東京都庭園美術館(旧朝香宮鳩彦邸、1933年、アンリ・ラパン及び宮内省内匠寮設計)や大丸心斎橋店(1932年、ウィリアム・ヴォーリス設計)がある。薬師寺はそれらよりも早期に中国銀行旧本店を一貫したアール・デコ様式で設計し、日本にアール・デコ様式を導入した建築家であったことを本論文で明らかにしており、日本の近代建築史の中におけるアール・デコ様式の導入を論じている点も評価に値する。

岡山県という一地方において孤高を守った建築家の研究を積み重ね、日本の近代建築史の厚みをつくることに貢献する貴重な研究である。

本論文は次の3編の学術論文(審査付)と2編の参考論文をベースとしている。

〈学術論文〉

- (1) 上田恭嗣：建築家薬師寺主計の経歴と建築活動について、日本建築学会計画系論文集、第509号、pp.209-215, 1998.7
- (2) 上田恭嗣：建築家薬師寺主計のアール・デコ様式について—中国銀行旧本店における室内意匠からの考察—、日本建築学科学会計画論文集、第529号、pp.255-262, 2000.3
- (3) 上田恭嗣：建築家薬師寺主計の設計活動からみた倉敷のまちづくりについて—大原孫三郎の思想と浦辺鎮太郎に与えた影響について—、日本建築学会地域施設計画研究、No.18, pp.315-327, 2000.7

〈参考論文〉

- (1) 上田恭嗣：建築家薬師寺主計の研究 その2 人との出会い、日本建築学会近畿支部研究報告集、第35号・計画系、pp.1037-1040, 1995.6
- (2) 上田恭嗣：建築家薬師寺主計の研究 その5 アール・デコ様式の導入に関する考察、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)、pp.347-348, 1999.9